

建築を彩るテキスタイル 展 川島織物の美と技

Textiles for Architecture--The Beauty and Artistry of Kawashima Textiles



写真1：紋織窓掛試織「難波津式」 原画：考案部 明治30年代
W2036×H1252 所蔵：川島織物セルコン織物文化館

巡回展会期

- 大阪展 LIXIL ギャラリー大阪
会期：2012年6月18日(月)～8月23日(木)
休館日：水曜日、8/10-16
- 東京展 LIXIL ギャラリー(東京)
会期：2012年9月6日(木)～11月24日(土)
休館日：日祝日

開催概要

タイトル：建築を彩るテキスタイル展ー川島織物の美と技

英語タイトル：Textiles for Architecture--The Beauty and Artistry of Kawashima Textiles

企画：LIXILギャラリー企画委員会

制作：株式会社LIXIL

協力：株式会社川島織物セルコン
川島織物セルコン織物文化館

入場料：無料

開場時間： 10：00～17：00（大阪展）、10：00～18：00（東京展）

WEB サイト：http://www1.lixil.co.jp/gallery/exhibition/detail/d_002141.html

たていと よこいと

経糸と緯糸でさまざまな世界を描き出す織物。本展では、主に衣服に用いられてきた染織品を、空間を彩る室内装飾に発展させた川島織物の二代目当主、川島甚兵衛(1853～1910)が手がけた多くの仕事とおして、川島織物の美と技を実資料38点とその他関連資料を含めた50点の資料からひも解きます。川島織物は江戸末期に京都・六角室町で創業しました。明治期に押し寄せた近代化と西洋化の波をいち早く感じ取り、伝統産業にも変化が求められるとの思いで、川島織物は呉服しゅっかい悉皆業から織物貿易へと事業を拡張し、その中で二代甚兵衛が先んじて取り組んだのが織物による空間づくりでした。

【見どころ1】国内初の企業博物館「織物参考館」

二代川島甚兵衛は、1886～1887（明治19～20）年にかけて、ヨーロッパの織物の調査・研究として、フランスをはじめ、イタリア、ドイツなど8カ国を歴訪しました。染織に関するあらゆる知識を吸収しながら、室内にも織物が活かされている現状を目の当たりにし、同時に日本の織物が優れていることも再確認します。

そして1889（明治22）年、二代甚兵衛は京都三条通高倉の自宅の一隅に、わが国初の織物の企業博物館「織物参考館」を建設しました。1、2階は国内外から蒐集した裂地や書籍を保存管理する染織品専門の博物館施設とし、3階では壁面や窓掛から、敷物、テーブルクロス、椅子張に至るまで織物で装飾しつくしたショールームを作り、日本式室内装飾の具体的な提案をしました。

<主な展示>「織物参考館」のほぼ実物大レプリカと模型を展示します。レプリカでは、綴織で壁面を飾った壁張作品「光琳四季草花」（シルクスクリーンにて再現）の、大胆に図案化された花や草木の美しさと空間の迫力を体感いただきます。

【見どころ2】考案部の創設

二代甚兵衛が渡欧後に行ったもう一つの偉業が、図案を制作する考案部の創設です。西陣織が持つ絢爛豪華な美しさに注目していた彼は、帰国直後に綴織や紋織などで絵画表現を再現する本格的な「美術織物」の製織を開始します。それには精巧な織下絵が必要となったため、考案部がつくられ、一流の画家による下絵が何枚も生まれました。

<主な展示>久保田米僊（べいせん）が描いた壁掛の原画「藤花に水鳥」などを紹介、大胆な筆跡や彩色の美しさを間近にご覧いただきます。また第五回内国勸業博覧会（1903年）御座所内の窓掛に使用された「難波津」は、百済の王仁が詠んだと伝えられる詩を主題に、梅・葦・青海波を配した意匠を考案しました。その貴重な図案と試織をあわせて展示します。

【見どころ3】万国博覧会へ

二代甚兵衛は、日本式室内装飾の提案と販路拡大に向けて、積極的に万国博覧会に出展しました。セントルイス万博（1904年）に出品した「若冲の間」は、原画を伊藤若冲の「動植綵絵」をもとに綴織どうしよくさいえで壁面装飾し、天井、窓掛、家具や什器に至る一切を特製しました。また、パリ万博（1900年）では出品

した綴織「群犬」が最高榮譽賞を受賞し、その後イギリス王室に贈与されました。

＜主な展示＞「若沖の間」は模型を展示し、さらに窓掛の図案や試織、木彫見本を紹介します。また、パリ万博の「群犬」はその試織から日本の織りの精緻さをご覧ください。

【見どころ4】二代甚兵衛、最後の事業—オランダ・ハーグ平和宮殿の仕事

1913（大正2）年に竣工したハーグ平和宮殿のため、日本政府は宮殿内にある巨大な壁面を飾る綴織の意匠と製作を二代甚兵衛に囑命しました。彼は日本の自然美と情景を謳歌する構図を日本画家・菊池芳文に依頼し、約3年の歳月をかけて織り上げました。その見事さから、この大会議室は「日本の間」と呼ばれています。1985年頃に一度修復が行われ、2013年に100周年を迎えます。

＜主な展示＞菊池芳文直筆の草稿画と山田耕雲が模写した「晩春初夏百花百鳥」の屏風が登場します。一面に広がる迫力と情景の豊かさを、十分に堪能いただけることでしょう。

■リリース用画像

使用希望の写真は全てウェブサイトのリリースよりダウンロードしてご利用ください

http://www1.lixil.co.jp/gallery/exhibition/detail/d_002141.html

写真2



写真3



写真4



写真2：綴織壁掛原画「藤花に水鳥」久保田米僊 1887（明治20）年
久保田米僊の直筆で、川島織物の綴織壁掛のルーツとも言える作品。

写真3：セントルイス万博「若沖の間」再現模型
若沖の間の完成予想図となる室内図（内装図面・天井図・窓掛図）を描いた絹本着色の卷子をもとに制作した模型。

写真4：綴織額「群犬」部分 竹内鎌太郎下絵 1898（明治31）年
この作品はパリ万博に出品し、最高榮譽賞に輝いた。二代川島甚兵衛が日本の織の精巧緻密さを西洋に知らせる目的で織らせたもの。 写真提供及び所蔵すべて：川島織物セルコン 織物文化館

■関連企画のご案内

〔講演会〕川島織物・今につながる伝統の美と技

講師／松村 隆史（織物文化館館長）

日時／2012年10月19日（金） 6:30 p.m.～7:30 p.m.

会場／LIXIL:GINZA 8階 セミナールーム *要予約、定員80名

二代川島甚兵衛がどのような思いで織物文化館の前身である「織物参考館」を建てたのか。当時の様子とともに、甚兵衛の志や美意識などについて、所蔵資料のヴィジュアルとともに語っていただきます。是非ふるってご参加ください。

■新刊 LIXIL ブックレットのご案内

LIXIL BOOKLET 『建築を彩るテキスタイルー川島織物の美と技』 8月下旬発売予定

(80 ページ内カラー56 ページ／予定、税込価格 1,890 円)

ー本件に関するお問い合わせー

xbn@lixil.com

大阪会場担当: 高橋麻希

東京会場担当: 筧 天留